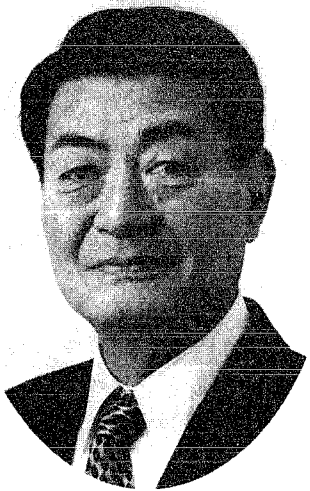


年頭のご挨拶



小須戸町長 佐藤 太加志

新年おめでとうございます。町民の皆様には心穏やかに、新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

平安な年にと、今年もまた年頭にあたり、自然災害や火災、交通事故などがないことを祈念し、また「まごころの町」にふさわしい平和な地域であることを念願した次第であります。

今や国内では悲惨な事件が相次ぎ、世界的には一昨年の米国での多発テロの後遺症が未だに後を引き、各地で激しい攻防が

続いていますことは、真に心の痛む限りであります。

また我が国と近接する朝鮮民主主義人民共和国では日本人拉致事件や核兵器開発疑惑の問題が大きくクローズアップされており、不安感を増幅しております。今世紀こそは世界の安全、平和をと祈っている一人として、誠に遺憾に堪えません。

一方、安堵し、明るい出来事がありました。長年、疑惑とされておりました拉致の問題が、五名の方々の本国帰還により事

犯が証明されたことは大きな快挙であり、またこの方々に祝福とお喜びを申し上げる次第であります。皆様には一日も早く日本での生活に慣れられ、また彼等に残されたご家族も無事に帰還され、一緒に暮らせる日が早く来ることを念願いたします。さて転じて地域のことになります。次に市町村合併についてであります。昨年十月には新潟市を中心とした十二市町村で構成する新潟地域合併問題協議会（通称、合併任意協）の一員となり、いよいよ本格的な協議に入る段階となりました。

過去に市町村合併は、時代の変遷、国や地方の状況変化に伴い歴史の中で行われてきました。が、今日のスピード化、情報化

された社会に於いても論点の一つであろうかと思えます。そして合併問題は、各地域の将来的な発展と住民福祉、福利の向上、充実の為に真剣に取り組んで参らねばならない大切な問題点であります。

小須戸町では数年来、町の現状の分析を行い、将来ビジョンを考えながら構想を練り上げ、小須戸町第四次総合計画を昨年策定いたしました。

この計画には市町村合併も視野に入れた未来像があります。現在はこの計画に肉付けをしており、新たにこの二年間では、しっかりととした路線を敷かなければならない大切な時期でもあります。これから進めていく任意協での協議の過程に於いては、町民の皆様には情報の提供を行いつつながら慎重にかつ真剣に取り組んでまいり所存であります。

さて、世情は相も変らぬ経済不況の中にあり、国・地方とも厳しい財政状況の中で懸命に努力をされているところであります。

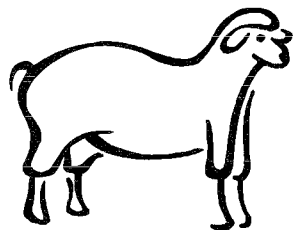
当町も目下、平成十五年度予算の検討時期に入っております

が、住民皆様の福祉・福利は停滞せぬように努めると共に、地域活性化の手は緩めることなく推進して参りたいと思っております。

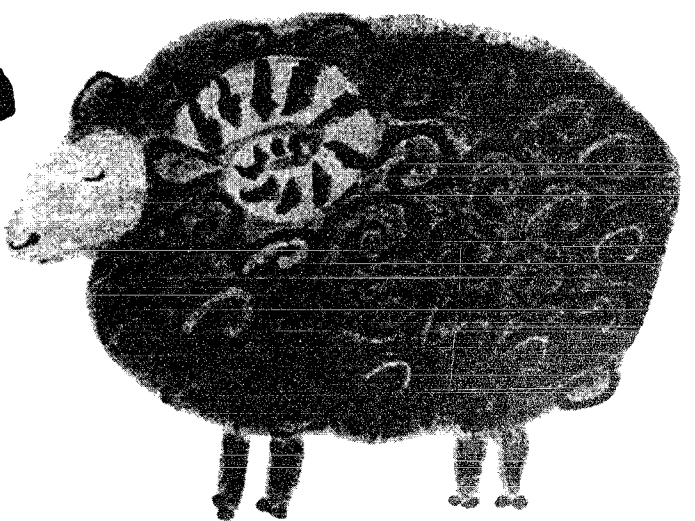
平成十五年度にはこれまで協議を進めて参りました、矢代田駅周辺整備の都市計画決定を確たるものにしたと思っております。また花とみどりのシンボルゾーン周辺整備事業も、その第一次計画分の地域交流型施設も事業化に向けて努力しております。

また町民体育館玄関のバリアフリー化工事とトイレの改修も十五年度の早い時期に行いたいと思っております。併せて長年の念願であった町体関連駐車場の造成も完了したいと思っております。その他では、懸案となっております。その他では、懸案となつておりました新津警察署小須戸交番も昨年十二月に完成移転が

為され、矢代田地区と小須戸地区の中間地点に設置されたことにより、新体制と共にその機能が大きく発揮されることと期待しております。新たにこの交番とともに県道沿線には公的施設



今年は無羊



ゆたかに羊乳

平成十五年は無羊年です。羊は、「おとなしい」「柔順」「群れになる」などのイメージがありますが、何よりもわたしたちが実感できるのは、ウールのセーターや皮製品の肌ざわりと温かさです。

羊は紀元前六千年ごろ、家畜化されたといわれています。馬が家畜化されたのが、紀元前三千〜四千年ごろですから、羊と人間の付き合いは、かなり長いことになりました。

日本には羊にまつわる諺があまり多くありません。すぐに思いつくところでは、「羊の皮を着た狼」「羊頭狗肉」くらいのものです。曲がりくねった山道を「羊腸」と表現しますが、これはちょっと古臭い感じがしますね。

では、なぜ羊に関する諺が少ないのでしょうか。西暦五九九年、推古天皇の時代に、百濟から二頭の羊が贈られたと、日本書紀に記されています。

しかし、羊は乾燥した風土が好きなので、日本の気候が合わないから輸入していません。

さて、「一年の計は元旦にあり」といいます。今年の目標を決め、「迷える羊」にならないよう、スタートを切りたいものです。

なかったのでしょうか。あまり繁殖しなかったようです。そのため、欧米のように諺が多くないのだろうといわれています。

明治の初期、政府は綿羊の飼育振興を試みましたが失敗。その後、軍服などの製造のために、羊の飼育が奨励されました。また、戦後は農家の副業として、多いときは百万頭も飼育されていました。しかし、現在の飼育頭数は、北海道や東北などを中心に、三万七千頭ぐらいに過ぎません。最近では、全国各地で観光牧場などの整備が進み、子供たちが羊を見る機会は増えました。

羊毛は、天然繊維の人気上昇で、日本での需要が増えていきます。外国産が中心で、オーストラリアやニュージーランドなどから輸入しています。

さて、「一年の計は元旦にあり」といいます。今年の目標を決め、「迷える羊」にならないよう、スタートを切りたいものです。

さて、「一年の計は元旦にあり」といいます。今年の目標を決め、「迷える羊」にならないよう、スタートを切りたいものです。